をりにふれて

よく笑ふ人と云へどもよく泣くと多くの人は我を知らなく
我が歌をあざけりきかぬ友が顔何の友かと思ひても見つ
いたつきは起らずやなど北國に雪とたゝかふ友が上思ふ
銀杏返しなでまはしては娘といふやさしき氣にもなりてみしかな

吉永ふみ

熊祭りを見て

のどやかにかなしき歌をうたひつゝ亡びゆくかな女夫のアイヌ等

河崎なつ

病みて臥して

文科四年　樫部鳥羽子

ゐひ人のふたりみたりがわがものにあるける町
を寂しみて行く
人をこひぬたゞわけもなく人をこひぬ思ひ出つ
るまゝのみ名をよびつゝ
寄宿舎の机によりて日記をかき遠き電車のきし
る音を聞く
死のかげの我れにも添へる心地して心細さのせ
まり來るよひ
いつまでかかゝる心に世にいきんひそかに思ふ
我が生のはて
起きてより床に入るまで何事かなしつゝ暮す日
をあやしみぬ
よわきもの人なりけりないさゝかの病をえても
かなしかりけり

強きものわれなりけりと思へども思ふあとより
寂しさのわく
此の一夜いかに降るらん雪の朝井の端にたつ母
君をおもふ
かすかなるひゞきのこしてとぎれたる受話器を
持ちてひとりなきしか
あか〳〵ともる電氣もうらがなし小さき部屋
に病みて臥せれば

大竹千葉子

たゝひとり文よむ夜半にゆくりなく友の玉章え
たる嬉しさ
たえだえの罪をもせめでねもおもに文よせたま
ふ友のみなさけ
ひたすらに文よむ夜半の一時をゆめみて過おす
われのおろかさ
文机に結びし夢のあと消えて思へばかなし父上
のかげ
父まさば内外の事に心をばいたむる事はなき身
ならまし

秋の日よめる

いと細き虫の音きゝてつくづくとおもへば父も
なき身なりけり
はらからの行末思ひ小さき胸いたむる宵を虫な
きしかな
いつしかに草子にあきて花瓶の菊の一花ふとむ
しりけり
文机に匂ふ白菊手折りつゝ友にしたしむ歌おも
ひしぬ
あかつきの空にのこれる月見つゝ箒もつ手に木
の葉ちるなり
朝まだき清めし庭にはら〳〵と散りしく木々の
梢淋しも
時雨降りしづけき秋の夕暮に手ずさむ琴の音し
かなしも
月冴えて虫の音しげき此の夜頃奈良の都は淋し
かるらむ
住みなれし奈良の小鹿は今宵こそ春日の森にな
きあかすらむ